

森鷗外における大逆事件と陽明学

—井上哲次郎との比較による—

山村 奨

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

要 旨

本研究ノートは、森鷗外が大逆事件と陽明学の関連についてどのように考えていたかを井上哲次郎との比較を通して明らかにする。井上は大逆事件が起きた当時、背景に陽明学があると述べたが、鷗外が陽明学の具体的な思想や、事件のことに直接触れた作品は皆無である。しかし、事件の少し後に書かれた小説『大塩平八郎』は、大逆事件との関連が指摘されている。また同作品から、鷗外の陽明学観を考察した研究もある。ところが同作品を通して、鷗外が陽明学と大逆事件の関係をどのように考えていたか、考察した研究はない。それを同作品から読み解き、井上と比較する。

事件の当時、大塩のために陽明学と謀反との関連を問題にすることは、珍しくなかった。井上は大逆事件の以前から、陽明学者・大塩の反乱行為が社会主義に通じるとして非難しており、陽明学に批判的な目を向けていた。さらに犯人の処刑後に開かれた講演会では、陽明学と事件が関連すると語った。そのような状況の中、鷗外が執筆の主な資料とした幸田成友の『大塩平八郎』は、大塩への肯定的な評価をしている。しかし鷗外の作品は、必ずしもそうではない。

鷗外は井上に似て、大塩の動機を評価しながら、反乱には否定的であった。しかし、そのことと陽明学を関連づけてはいない。鷗外は大塩の行動が、貧困にあえぐ民衆のために引き起こされたとしており、「未だ覚醒せざる社会主義」と考えた。鷗外は大塩の陽明学ではなく、社会主義につながる「暴力」を問題視していた。その裏には、大逆事件への非難がある。

一方で、陽明学からは社会主義が生じなかったと書く。ここでは、陽明学そのものを批判の対象とはしておらず、大塩の暴挙のみを批判していた。よって鷗外は、大塩の奉じた陽明学と、大塩の行為を明確に分けて考えている。

この点で、鷗外と井上の見解は異なる。井上は大塩の行動が社会主義とつながり、陽明学も非難されるべきと考えた。鷗外は、救民のための大塩のおこないが社会主義に通じるとみなしていたが、その批判は大塩の暴力的な姿勢に向けられていた。鷗外は大塩という謀叛人が、飢饉によって生じたのであり、陽明学の影響ではないと考えた。両者の差は、大塩の行為に対する陽明学の影響への見解の差である。鷗外は陽明学から、大逆事件を起こすような反逆思想は出てこないと理解していた。

キーワード：森鷗外、大塩平八郎、大逆事件、陽明学、井上哲次郎、社会主義

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1. 本論文の目的 | 5. 森鷗外の作品と大逆事件 |
| 2. 明治期の大塩評価 | 6. 森鷗外における大逆事件と陽明学 |
| 3. 井上哲次郎と森鷗外 | 7. まとめ |
| 4. 井上哲次郎における陽明学と大逆事件 | |

1. 本論文の目的

大逆事件は、天皇を狙ったテロ未遂事件として、近代史にはほかには例のない出来事である。この事件には多くの先行研究があるが、本論の目的は、二人の人物を対照させることで、これまで触れられてこなかった大逆事件と陽明学との関連が、当時どのように考えられていたのか、その一端を記述することにある。その二人が、井上哲次郎（1855〈安政2〉年—1944〈昭和19〉年）と、森鷗外（1862〈文久2〉年—1922〈大正11〉年）である。本論ではそのうち、鷗外における陽明学と大逆事件との関係を考察の中心とする。

井上哲次郎は江戸期の儒学を書いた三冊の本のうちの第一作『日本陽明学派之哲学』（1900〈明治33〉年、富山房刊）の意図は、陽明学の思想を国民道徳に援用することにあつた¹⁾。

若し我国に於ける国民的道徳心のいかに知らんと欲せば、其国民の心性を鎔鑄陶冶し来たれる徳教の精神を領悟するを要す、即ち此書叙述する所の日本陽明学の哲学の如き、豈に此に資する所なしとせんや²⁾。

一方で、鷗外が陽明学の具体的な思想や、大逆事件に直接触れた作品はほぼ皆無であるといつてよい³⁾。しかし、事件の少し後に書かれた小説『大塩平八郎』が謀反という題材を扱っているため、大逆事件との関連が度々、指摘されている。また同作品の背景に、陽明学の思想を読み取る研究も複数ある。これには、大塩平八郎が陽明学を学んでいたことの影響もある。ところが同作品に対して、陽明学と大逆事件の双方と

鷗外の関係性を考察した研究は見当たらない⁴⁾。

本論文では、井上哲次郎の陽明学と大逆事件に対する態度を考察した後、『大塩平八郎』を中心として、鷗外が両者のつながりをどのように考えていたのか明らかにする。本論文では両者の文章に即して、陽明学と大逆事件との関係についての、意見の相違を確かめる。

2. 明治期の大塩評価

明治期において大塩は、必ずしも陽明学者として注目されていた訳ではない。むしろ、その行動に着目して語られていた。1879〈明治12〉年に出版された『古今民権開宗 大塩平八郎言行録』（井上仙次郎著、有恒堂刊）は、自由民権運動の興隆において、大塩の民衆救済の行動を評価した書である⁵⁾。また三宅雪嶺は、知人の国府種徳が書いた『大塩平八郎』に序文を寄せた。その中で、「平八郎が猛然崛起したるは当を得たるの事、何の不敬か之れ有らん⁶⁾」と述べた。三宅が浮き彫りにしているのは、困窮する民衆のために、命を賭して立ち上がる英雄としての大塩像である。

実際に日本の近代において、大塩の人物像は上記のように捉えられる向きが強かった。明治期には、大塩の乱が軍事講釈の題目や歌舞伎となり、庶民の間で大塩の存在は人気を博していた⁷⁾。明治期には特に、「勸善懲悪の芝居や講談、少年読み物」が、大塩を題材にして作られている⁸⁾。三宅のような見方は、当時の大塩への人気を反映している。

一方で三宅は大塩に対して、別の側面からも評価していた。

我が邦古来忠義の士に富む、而も窮民の爲めに貪婪の符号を撃たんとして崛起せしもの、独り平八郎に儔（かがみ）せざるべからざるなり、此の如きは空前絶後、古往今来唯大塩平八郎一人あるのみ、彼れは自然に社会主義を得たるもの、而して、竟に主義のために斃れたるものなり⁹⁾。

三宅は大塩の行為を、社会主義との関連で見て評価している。これは大塩を民衆の救済者とする見方とも一致する。

幸田成友（史学者・幸田露伴の弟）が1910（明治43）年に出版した『大塩平八郎』は、世間の大塩を謀反人だとする説に反論して、大塩を「一代の偉人なり」¹⁰⁾と評価している。森鷗外は、この幸田の著作を主な資料として『大塩平八郎』を書いたことを、同作品に附した『附録』の中で述懐している¹¹⁾。ところが鷗外の大塩への評価は、幸田とは異なる見解に立っていた。その点を井上哲次郎の見解と比較しながら検討していく。ところで井上哲次郎と森鷗外は旧知の間柄であった。

3. 井上哲次郎と森鷗外

井上は鷗外と同年の1884（明治17）年、ドイツに留学し、帰国は井上が90年10月、鷗外が88年9月で、同時期を同じ異国で過ごしたことになる。両者はドイツにおいて結成された日本人会「大和会」で対面している¹²⁾。井上は当時、ハイデルベルクで法学者の宮崎道三郎から、鷗外が訳したゲーテの「盗侠行」の詩を見せられた。井上はこの訳業を高く評価し、『東洋学芸雑誌』に掲載の便宜を図ったという¹³⁾。その後も、鷗外は投宿先で井上と何度か顔を合わせ、哲学や文学について意見を交わしている。なお、この時期に井上と親交を結んだことで、鷗外の「儒学思想や中国文学への造詣が深められた」と推察する研究もある¹⁴⁾。また、鷗外は九州時代に、陽明の言行録である『伝習録』を買い求め、母

親に感想を書き送っている¹⁵⁾。

その後、鷗外は文部省に設置された教科書用図書調査委員会に招聘され、1908年（明治41）年9月には、調査委員会の第一部主査委員となった。没年まで、その職にあったことが分かっている¹⁶⁾。鷗外が関わったのは、小学校用の修身教科書であり、中村文雄によれば、「日記からだけでも、会議に三十数回も出席し、第二期第三期国定修身教科書にかかわった」¹⁷⁾という。同じ修身教科書の調査委員に井上哲次郎もいた¹⁸⁾。異国で親しくなった二人が、20年ほどの時を経て、同じ役職についたことになる。

とはいえ、この時点で両者にどの程度の交流があったのかは、定かではない。留学後の二人の心情を推しはかる、次のような挿話がある。井上が東京帝国大学文科大学長を務めていたとき（1897（明治30）年—1904（明治37）年）、美学を志望していた高山樗牛に、海外留学の便宜を図ったとの噂が流れた。樗牛本人は急病のために留学を断念せざるを得なかったが、一連の話が鷗外の耳に入った。すると鷗外は、親友の賀古鶴所に宛てた手紙の中で、こう毒づいたという。

高山林次郎（筆者注・樗牛の本名）は洋行をとり消し文科大学の国文学の教師（講師）になり候国文学とは随分縁のなき話にて今の文科は井上哲二（ママ）郎に気に入ればどうもなる事と相見え候¹⁹⁾

ドイツ留学当時は親交が厚かったものの、この時点で鷗外が井上に対して、好感を抱いていたとはいいがたい。留学時の鷗外と井上の交流を丹念に追った小堀桂一郎も、同様の判断をしている。その根拠として、「中年期以降の森の文章の中に井上の名が殆ど現れてこないこと」²⁰⁾を挙げている。しかし少なくとも、両者は上記の役職に在任していた当時、例の大逆事件に直面したことになる。

次章では、大逆事件を陽明学との関連で批判した井上の言説が、どのような内容であったのかを確認する。

4. 井上哲次郎における陽明学と大逆事件

大逆事件のおよそ10年前、井上は『日本陽明学派之哲学』の中で、大塩の行為について以下のように述べている。

但々王学の結果は一視同仁の平等主義となるの傾向なしとせず。藤樹の如く分明に平等主義の観念を有せり。故に中斎（筆者注・大塩の号）が暴挙の如き自ら社会主義に合するものなしとせざるなり²¹⁾。

井上は、困窮した民を率いて蜂起した大塩の行為を「暴挙」と称し、社会主義に通じるとして、陽明学が社会主義に発展する危険性を見ている²²⁾。井上は、陽明学の危険性を次のようにいう。

然れども王学亦弊なしとせず。王学は主観的に偏しやすし。主観的に偏するが故に、客観的事実を軽侮し、動もすれば即ち感情に駆られて、身を誤まるものあり。其故いかん。道徳は主観的には円満の境界に達し得べきものなり。是故に王学者は致良知の工夫によりて主観的に円満なる道徳を実現せんことを期し、単に此一途に奔趨せり²³⁾。

陽明学が主観的な視点のみで道徳を実現しようとするため、弊害を生むことがあると述べる。井上の陽明学批判は、陽明学が周囲を顧みない反乱に転化する可能性を根拠としていた。なお同様の批判は、朱子学者の陽明学批判にも見られ、井上がそれに影響を受けていたことも考えられる²⁴⁾。

大逆事件が起こると、井上は被告の処刑後に開かれたある講演会に参加した。当日は井上の他に、南条文雄、渋沢栄一、三宅雪嶺、花田仲

之助が登壇した。この大会は政府側の立場として、登壇者の一人でもある花田によって企画された講演会であった²⁵⁾。当時の新聞に掲載された記事によると、井上の講演の内容は次の通りである。

文学博士井上哲次郎氏は「傍聴に来たら飛入を頼まれた」と云って幸徳が仏国革命思潮と中江兆民から受継いでいた事、幸徳は土佐陽明学者佐藤一斎の弟子奥宮象（ママ）斎の弟子で奥宮健之は此三男だと云う事を並べ陽明学と仏国革命思想と、社会主義の危険な事を述べて引下がる²⁶⁾。

この大会で三宅以外は全員、事件や被告を非難したが、三宅だけが「政府の思想弾圧、裁判の非公開性を批判した」²⁷⁾という。これに来賓の一人、代議士の荒川五郎が憤慨して壇上に乱入する。三宅の講演が終わった時には既に、荒川が自分にも演説をさせるよう、主催者側と押し問答をしていたという²⁸⁾。この後に、井上による上記の講演があった。

そうなるに井上が「傍聴に来たら飛入を頼まれた」と述べたのは、混乱を収めるまでの間、ひとまず場つなぎを頼まれたと考えられる。そう仮定して、井上の講演の内容を見てみる。すると、事件と陽明学との関連について、秋水が奥宮健之の弟子で、一味の奥宮健之がその息子であることを根拠にしているのは、いささか急ごしらえの強引な議論という感がなくもない。井上にとって陽明学は、反乱と社会主義に通じる思想であった。次章では鷗外の作品における、大逆事件の影響について考える。

5. 森鷗外の作品と大逆事件

鷗外が大逆事件に触発されて書いた作品といえば、1910（明治43）年11月に発表された『沈黙の塔』²⁹⁾が有名である。物語は「パアシ族」の内部に、爆裂弾を持つ無政府主義者が現れた

ことをきっかけにして、「社会主義」に関する出版物が禁止となり、そのために「自然主義」に関する書物も禁止されるという内容である。鷗外は「自然主義」などの新たな「文芸上の運動」は擁護されるべきことを述べている。しかし本論文にとって重要な点は、鷗外が新たな「文芸上の運動」は擁護している、「社会主義」の禁止については非難を加えていないことである³⁰⁾。

1911(明治44)年に発表した「文芸の主義」(原題「文芸談片」と題する評論でも、鷗外は同様の主張を述べる。

無政府主義と、それと一しょに芽ざした社会主義との排斥をするために、個人主義と云う漠然たる名を付けて、芸術に迫害を加えるのは、国家のために惜むべき事である。学問の自由研究と芸術の自由発展とを妨げる国は栄える筈がない³¹⁾。

鷗外は特定の思想ではなく、「芸術」や「学問」の自由が阻害されることに危惧を表明している³²⁾。山崎國紀はこの小文のほかに『評伝森鷗外』の中で、大逆事件が影響を与えて執筆を促した作品として、『フラスチエス』、『食堂』を挙げている³³⁾。『フラスチエス』は事件が明るみから、数カ月後に執筆された作品である³⁴⁾。「風俗を壊乱する」著作物に関して官吏と記者と文士が意見を述べるという内容である。官吏は、書物が処罰される基準について「社会一般を標準とする」、すなわち社会通念に従うとしている。それに対して文士はそのような基準は「極めて不確実な、極めて動き易い」ものであることを指摘して、役人ひとりひとりの思想や感情も異なると述べる。山崎國紀は、このような記述がある点で同作品には、大逆事件との関連が指摘できるという³⁵⁾。たしかに上記のような内容は、鷗外が権力による思想弾圧を批判したともいえる。しかし、鷗外が批判したのは自由な精神活動の抑圧であり、反体制を支持していた訳で

はない。鷗外はあくまで、社会主義には否定的な立場であった。

本論で言及するのは、それから少し時期は遅れるが、江戸期の大塩の乱を題材にした小説『大塩平八郎』である。鷗外は同作品を、1914(大正3)年に発表した³⁶⁾。大塩の乱の一日から、翌日の大塩父子の死、その後の事情までを創作を交えて時系列に記してある。先述したように、鷗外は幸田の資料を参考にしたものの、必ずしも大塩を肯定していない。

先行研究によれば、山崎一穎は、鷗外が「大塩平八郎に執着する背景には、大逆事件がある」と明言している³⁷⁾。鷗外は『附録』の中で、「大塩の思想は未だ覚醒せざる社会主義」³⁸⁾であると述べていた。尾形侑はこの事実に着目して、次のように考える。

「未だ覚醒せざる社会主義」とは、大塩事件に対する鷗外の解釈であるとともに、大逆事件に対する解釈とも重なっていたのである³⁹⁾。

こうした解釈の元になったのが、小田切秀雄である。小田切は、鷗外が同作品を執筆した背景について、「明治四三―四(ママ)年にかけての大逆事件をめぐっての一箇のインテリゲンチヤとしてのニヒリスティックな実感である」と述べた⁴⁰⁾。いずれも、鷗外が大逆事件に触発されて、『大塩平八郎』を書いたと説いている⁴¹⁾。

一方で同作品から、鷗外が大塩の行為と陽明学の関係についてどのように考えていたかを読み解く論考もある。同作品の第4「宇津木と岡田と」で、彦根藩士の宇津木は、大塩の弟子でありながら乱の計画に参加を躊躇し、大塩の指示によって乱の前に殺された人物として描かれている⁴²⁾。鷗外は、大塩が裏切り者を抹殺したこともはっきりと描写している。

先生はざっとこんなことを説かれた。我々

は平生良知の学を攻めている。あれは根本の教だ。然るに今の天下の形勢は枝葉を病んでいる。民の疲弊は窮まっている。草妨礙あらば、理亦宜しく去るべしである。天下のために残賊を除かなくてはならぬと云うのだ⁴³⁾。

「良知の学」とは、陽明学のことである。尾形仿は、「草妨礙あらば、理亦宜しく去るべし」の注として、『伝習録』の中の「艸有妨礙、理亦宜去」を引用し、「花に対する草を心に対する妨礙者に譬え、妨礙者を去るにあたっては、理としてこれを去るべきなら去ってもよいと教えたもの」⁴⁴⁾と説く。すなわち鷗外は、花を邪魔する草を除くのが「理」であるように、残賊を除くのも「理」であると大塩に語らせている。

鷗外は続いて、「残賊」という言葉について、宇津木に以下のように説明させる。

そこでその残賊だがな。先ず町奉行所衆位の所らしい。それがなんになる。我々は実に先生を見損っておったのだ。先生の眼中には將軍家もなければ、朝廷もない。先生はそこまでは考えておられぬらしい⁴⁵⁾。

ここで鷗外は宇津木の口を借りて、大塩の行為が奉行所に対する抗議であり、体制や革命までを視野に入れているものではないと難じている。鷗外は大塩の行為に、社会的な限界を感じていた。社会主義にすら発展しなかった大塩の行為を、「未だ覚醒せざる社会主義」と評している。ただしそれは、鷗外が大塩の反体制の姿勢を、支持していたことを意味しない。

鷗外が大塩の思想を評した「未だ覚醒せざる社会主義」とは、どのような意味であろうか。この言葉は『附録』の中で、もう一度使われている。

次いで天保の飢饉になっても、天保七年五

月十二日に大阪の貧民が米屋と富豪とを襲撃し、同月十八日には江戸の貧民も同じ暴動をした。此等の貧民の頭の中には、皆未だ覚醒せざる社会主義があったのである。彼等は食うべき米を得ることが出来ない。そして富豪と米商とが皆資本を運転して、買占其他の策を施し、貧民の膏血を涸らして自ら肥えるのを見ている。彼等はこれに処するにどう云う方法を以てして好いか知らない。彼等は未だ覚醒していない。唯盲目な暴力を以て富豪と米商に反抗するのである。平八郎は極限すれば、米屋こわしの雄である⁴⁶⁾。

ここで鷗外は、大塩に対して「米屋こわしの雄」と評している。鷗外は、大塩の行為を単なる「暴力」と認識していた。大塩の暴力行為を、民衆を困窮させる「富豪と米商」に対して、危害を加えるものであるとみなしている。すなわち「未だ覚醒せざる社会主義」とは、貧民が走った暴力行為を指している。それは、社会主義すら生じさせなかった⁴⁷⁾。ここに、鷗外は大塩の行為は暴力に過ぎなかったという限界を見ている。

この点を小泉浩一郎は次のように結論づけている。

作品に仮託された〈現代〉への作者の対応は、明治末年から大正初年にかけて露呈し来たった政府支配権力の反動的施策に対する批判であると共に、大逆事件の一部被告によるテロリズム—「未だ覚醒せざる社会主義」=無政府主義に由来する「盲目な暴力」に対する批判でもある、と云わなければならないだろう⁴⁸⁾。

鷗外が政府批判と同時に、「暴力」のために大塩らの行動及び、無政府主義を批判しているという見解である。鷗外は『大塩平八郎』を通して、大塩の「暴力」を非難の対象としていた。その

背景には、大逆事件への意識が感じ取れる。鷗外は完全な政府寄りの人物ではなかったであろうが、かといって謀反のような行為は是認していなかった。

最後に鷗外の大塩観と陽明学がどう大逆事件に結びつくのかを検討する。

6. 森鷗外における大逆事件と陽明学

鷗外は『附録』の中で、次のように書いている。

平八郎は哲学者である。併しその良知の哲学からは、頼もしい社会政策も生れず、恐ろしい社会主義も出なかったのである⁴⁹⁾。

大塩を陽明学者とした鷗外であるが、社会政策、及び社会主義との間には一線を引いている。もし大塩の思想が、社会に対してよい影響を与えるとすれば、「頼もしい社会政策」になるし、社会秩序の破壊に結びつくのであれば、「恐ろしい社会主義」になる。鷗外は大塩の陽明学が、社会的な視点を欠いていると同時に、社会主義にも発展しなかったと述べている。それは、大塩の行為を単なる暴力と見ていたためである。それは社会主義に発展する可能性はあったが、陽明学とは関連づけていない。

山崎國紀は鷗外が宇津木を「現実主義者」とみなしたのに対して、大塩を「理想主義者」と考えたとしたうえで、次のように評した。

鷗外が言いたいことは、陽明学の「知行合一」を信奉していても結局、大塩平八郎は、熟慮を重ねた本当の意味での「行」をとまわらない理想主義者であったということである⁵⁰⁾。

本来の陽明学は、反乱には結びつかないという評価である。鷗外は『附録』において、大塩の乱の動機が「簡単に云えば飢饉である。外に種種の説があっても、大抵揣摩である」⁵¹⁾と記した。

大塩が反乱を起こした要因を「飢饉」であったと明言しているのを踏まえて北川伊男が着目したのが、『附録』中の以下の記述である。

貧民の身方（ママ）になって、官吏と富豪とに反抗したのである。そうして見れば、此事件は社会問題と関係している⁵²⁾。

北川は陽明学について、「良知を致すことは万物一体の仁を実現することである」と考えて、大塩が救民を目指したのもこの思想に由来するという。そして、鷗外がこの作品を執筆した背景には、同時代への鷗外の「現実的な関心」があると指摘している⁵³⁾。すなわち鷗外は、大塩の行動を陽明学ゆえのことと見て、「米騒動」のような社会問題への関心と通底させているという意見である。ここでは、大塩の救民の行動が陽明学と関係が深いと、鷗外は陽明学に言及したとされている。

とはいえ鷗外は、大塩の行動を貧民が飢饉に苦しんでいるためとしているが、陽明学が関係しているとは述べていない。そこには、むしろ大逆事件との関連が考えられる。この点について、鷗外の『食堂』⁵⁴⁾では、役所の食堂で大逆事件とおぼしき出来事について、男たちが話している場面がある。

男のひとり、事件の犯人に極めて批判的である。「あの連中の目には神もなけりゃあ国家もない。それだから刺客になっても、人を殺しても、なんの為に殺すなんという理屈はいらないのだ」⁵⁵⁾と非難している。これは事件に対する、鷗外の評価と見てよい。

また別の社会主義の歴史に詳しい人物は、このような犯人がこれから増えるか、と質問されて次のように述べる。

先ずお国柄だから、当局が巧に舵を取って行けば、殖えずに済むだろう。併し遣りようでは、激成するというような傾きを生じ

兼ねない。その候補者はどんな人間かと云うと、あらゆる不遇な人間だね⁵⁶⁾。

鷗外は事件について、「不遇な人間」が今後そのようなことを起こすと書いている。これは大塩の行動の動機が、貧民のためであると認識していたことに通じている。鷗外にとって、不遇であるために直接的な行動を起こすという点で、謀反に走る人物と乱に参加した民衆の意識は共通していた。鷗外にとって貧民のための大塩の行動は、社会主義に通じる暴力の範囲におさまっており、陽明学とは関連がない。

まとめると、鷗外による『大塩平八郎』執筆の動機として、これまで大逆事件と陽明学との関連から論じられてきた。このうち前者では、鷗外が『附録』で社会主義に言及していることが根拠とされていた。『食堂』の文章と比較すると、不遇であっても暴挙に走ることは非難に値するという点で、鷗外が大塩の乱と大逆事件は通底しているとした姿勢が浮き彫りになる。

一方で後者については、同作品における意義の評価は、印象論にとどまっている。もし陽明学が貧民救済の行動を促す思想ならば、大逆事件との関連で語ることも不可能ではないが、鷗外は大塩の陽明学が社会的な視点を持たず、また社会主義につながることもなかったと明言している。本稿は未整理だった『大塩平八郎』における陽明学の影響の考察を大逆事件や社会主義との関係の点から再考した。

7. まとめ

鷗外の思想は、ある面で井上に似ている。鷗外が大逆事件の被告らに、否定的であったことは確かである⁵⁷⁾。鷗外は井上のように、反乱行為を非難していた。また鷗外は、大逆事件の弁護人として選出された平出修を通じて、「訴訟記録」の一部分を入手していた⁵⁸⁾。さらにその平出は、鷗外の下に弁護論を教えてもらいに来ていたようである⁵⁹⁾。鷗外にとって大塩の乱は、

社会主義を連想させる点で危険な行為であった。

しかし井上と異なり鷗外は、暴力と陽明学の思想を関連づけてはいない。彼にとって大塩の暴挙は、不遇な貧民が起こしたものであり、社会主義に通じている。しかしそれを、陽明学とは関連させていない。この点で、鷗外と井上の見解は異なる。

井上は大塩の「暴挙」が社会主義と通底すると考えて、陽明学を批判し、陽明学と社会主義の親和性を説いて、大逆事件の思想的背景を語った。一方で、鷗外も社会主義を批判し、「未だ覚醒せざる社会主義」である暴力のゆえに大塩の行為を非難している。大塩の行為は危険な社会主義を導く可能性があったと同時に、単なる暴力にとどまっており、大塩の陽明学と直接関連するものではない。

鷗外は『大塩平八郎』において、陽明学そのものと、大塩の企てた謀反という行為との間に一線を引いていた。『附録』では大塩の行為が、飢饉にあえぐ民衆に起因するという鷗外の見解が、明言されている。そのうえで、乱という暴力は「未だ覚醒せざる社会主義」であるとした。鷗外による大塩への批判は、貧民のためとはいえ「暴挙」に走ることに向けられており、陽明学には向いていなかった。

鷗外は大塩の一件を単なる「暴力」と規定して、大逆事件のような謀反に通じると考えている。それは鷗外が、両者をともに正当性がないものであり、不遇な人物たちが起こす行動にとどまると考えたことから分かる。そして鷗外は事実上、陽明学と大逆事件は無関係であると語っていた。鷗外の『大塩平八郎』には、陽明学から大逆事件を起こすような反逆思想は出てこないという意識が感じとれる。

注

- 1) あとの二冊は『日本朱子学派之哲学』（1902〈明治35〉年刊）と、『日本古学派之哲学』（1905〈明治38〉年刊）である。三部作の詳しい成立過程

- については、井ノ口哲也（2009）「井上哲次郎の江戸儒学三部作について」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系2』60: 227-239、を参照。
- 2) 井上哲次郎（1900）『日本陽明学派之哲学』富山房、序文。また井上が、陽明学を国家主義との関連で解釈したことに関しては、拙稿「『宗教』としての近代日本の陽明学」伊東貴之編（2016）『「心身／身心」と環境の哲学—東アジアの伝統思想を媒介に考える—』汲古書院、651-666頁所収、を参照。
 - 3) 唯一の例外は、「倫理学説の岐路」と題された小文である（木下空太郎編（1973）『鷗外全集』25巻、岩波書店 所収）。その中で鷗外は、陽明学を朱子学と同種思想と見ている（同書、244頁）。
 - 4) 明治末期に「修養」が注目された時期に、禅宗とともに陽明学が着目されていた。王成（2004）「近代日本における〈修養〉概念の成立」『日本研究』29: 117-145。また鈴木貞美（2013）『入門 日本近現代文芸史』平凡社、127頁、を参照。
 - 5) 大塩事件研究会編（1995）『大塩研究別冊 大塩平八郎を解く—25話—』耕文社、88-91頁。
 - 6) 国府種徳（犀東）（1896）『大塩平八郎』東京裳華堂、序、2頁。三宅は、近代日本における陽明学研究の嚆矢ともいえる『王陽明』（1893年、政教社）を出版している。
 - 7) 林田明大（2006）『財務の教科書』三五館、93頁。
 - 8) 大塩事件研究会編（1995）『大塩研究別冊 大塩平八郎を解く—25話—』前掲、92-95頁。
 - 9) 国府種徳『大塩平八郎』前掲、序、6頁。
 - 10) 幸田成友（1910）『大塩平八郎』東亜書房、序文。
 - 11) 木下空太郎編（1973）『鷗外全集』15巻、岩波書店、59頁。『三田文学』5（1）、1914年1月初出。雑誌掲載時の題名は、「大塩平八郎（評論）」。
 - 12) 当時の交流の様子は、鷗外の『独逸日記』（木下空太郎編（1975）『鷗外全集』35巻、岩波書店 所収）に、記録されている。また、宮本盛太郎（2001）「森鷗外・井上哲次郎・乃木希典—三者の関係—」『社会システム研究』4: 19-30、にも詳しい。
 - 13) 小堀桂一郎（2013）『森鷗外—日本はまだ普請中だ—』ミネルヴァ書房、134頁。
 - 14) 海老田輝巳（1996）「森鷗外の作品における陽明学」『語学と文学』26: 1-22。
 - 15) 木下空太郎編（1975）『鷗外全集』36巻、岩波書店、133-134頁、書簡268、月不詳24日、森峰子宛。
 - 16) 小堀桂一郎『森鷗外—日本はまだ普請中だ—』前掲、704頁。
 - 17) 中村文雄（1981）『大逆事件と知識人』三一書房、181頁。
 - 18) 1906（明治39）年3月から、1913（大正2）年にかけて、井上が著作者として名を冠して発行された修身用の教科書は、『修身教科書』、『女子修身教科書』、『教育勅語要義』など8編になる。文部省（1912）『小学校師範学校中学校高等女学校検定済教科書図書表』（明治39年2月-45年3月）文部省。及び、文部省図書局（1926）『師範学校中学校高等女学校小学校検定済教科書図書表』（自明治45年3月至大正3年2月）文部省図書局、を参照。
 - 19) 森於菟（1993）『父親としての森鷗外』筑摩書房〈ちくま文庫〉、327頁。同じく賀古に宛てた書簡の中で鷗外は、樗牛と井上を並べて「彼レハ金ノ威光此レハ上ノ威光」と非難している（木下空太郎編『鷗外全集』36巻、前掲、71頁、明治32年2月21日、賀古鶴所宛）。
 - 20) 小堀桂一郎『森鷗外—日本はまだ普請中だ—』前掲、136頁。
 - 21) 井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』前掲、408頁。
 - 22) 拙稿（2016）「明治期の陽明学理解—社会主義と明治維新との関係から—」『東洋文化研究』18: 99-118、も参照。
 - 23) 井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』前掲、序文。
 - 24) 例えば佐久間象山は、大塩の乱に接して、「天下を易んと欲する所は余姚之学也」（「山寺源太夫に贈る」天保9年6月28日 信濃教育会編（1935）『象山全集』3巻、信濃毎日新聞、9頁、書簡浦町時代24）と、陽明学の体制への危険性を述べている。
 - 25) 2月5日に開かれたこの講演会には、背景がある。1月24・25日の被告の処刑を受けて、2月1日に徳富蘆花が、「謀反人」を擁護する講演を第一高等学校でおこなった（徳富蘆花「謀叛論」中野好夫編（1976）『謀叛論 他六篇・日記』岩波書店〈岩波文庫〉、所収）。この蘆花の主張に反対する意図で、花田は講演会を企画した。
 - 26) 『東京朝日新聞』1911年2月6日付所載記事。なお井上の講演をめぐる詳細は、拙稿「明治期の陽明学理解—社会主義と明治維新との関係から—」前掲、を参照。
 - 27) 田中伸尚（2010）『大逆事件—一生と死の群像—』岩波書店、152頁。
 - 28) 同書、152頁。

- 29) 『三田文学』1 (7)、1910年11月初出。木下空太郎編 (1972) 『鷗外全集』7巻、岩波書店 所収。
- 30) 「此時禁止された出版物の中に、小説が交じっていた。それは実際社会主義の思想で書いたものであって、自然主義の作品とは全く違っていたのである」(木下空太郎編 『鷗外全集』7巻、前掲、387頁)
- 31) 『東洋』1911年4月号、初出。木下空太郎編 (1973) 『鷗外全集』26巻、岩波書店、425頁。
- 32) 渡辺善雄 (1982) 「西欧思想の擁護と排斥—大逆事件後の森鷗外と井上哲次郎—」『文芸研究』100: 121-134、も参照。
- 33) 山崎國紀 (2007) 『評伝森鷗外』大修館書店、452頁、及び447-454頁。
- 34) 『三田文学』1 (5)、1910年9月初出。木下空太郎編 『鷗外全集』7巻、前掲 所収。
- 35) 山崎國紀 『評伝森鷗外』前掲、448頁。
- 36) 『中央公論』29 (1)、1914年1月初出。木下空太郎編 『鷗外全集』15巻、前掲 所収。
- 37) 山崎一穎 (2012) 『森鷗外—国家と作家の狭間で—』新日本出版社、128頁。
- 38) 木下空太郎編 『鷗外全集』15巻、前掲、72頁。
- 39) 尾形仂 (1979) 『森鷗外の歴史小説—史料と方法—』筑摩書房、169頁。
- 40) 小田切秀雄 (1954) 『近代日本の作家たち』厚文社、103頁。
- 41) ほかに、武藤功 (1997) 『国家という難題—東湖と鷗外の大塩事件—』田畑書店。宮澤誠一 (2005) 『明治維新の再創造—近代日本の〈起源神話〉—』青木書店、も参照。
- 42) 宇津木矩之充は、実在の人物である。大塩と宇津木の関係については、宮城公子 (2005) 『大塩平八郎』ペリかん社、66-71頁、を参照。
- 43) 木下空太郎編 『鷗外全集』15巻、前掲、18-19頁。
- 44) 重松泰雄ほか編 (1974) 『日本近代文学大系12 森鷗外集Ⅱ』角川書店、356頁。
- 45) 木下空太郎編 『鷗外全集』15巻、前掲、19頁。
- 46) 同書、73頁。
- 47) 山崎一穎は、同作品執筆の要因として、明治末期に起きた「米騒動」を挙げている (山崎一穎 (2002) 『鷗外・歴史文学研究』おうふう、244-248頁)。
- 48) 小泉浩一郎 (1981) 『森鷗外論—実証と批評—』明治書院、228頁。
- 49) 木下空太郎編 『鷗外全集』15巻、前掲、73頁。
- 50) 山崎國紀「鷗外『大塩平八郎』の考察—初期歴史小説に貫流する思想性—」大塩事件研究会編 (2011) 『大塩平八郎の総合研究』和泉書院、317-346頁 所収。
- 51) 木下空太郎編 『鷗外全集』15巻、前掲、70頁。
- 52) 同書、72頁。
- 53) 北川伊男 (1970) 「森鷗外の『大塩平八郎』と陽明学」『皇学館大学紀要』8: 337-360。
- 54) 『三田文学』1 (8)、1910年12月初出。木下空太郎編 『鷗外全集』7巻、前掲 所収。
- 55) 木下空太郎編 『鷗外全集』7巻、前掲、415頁。
- 56) 同書、419頁。
- 57) 山崎國紀は、鷗外が友人の禅僧、玉水俊競に宛てた1910 (明治43) 年11月の手紙で秋水ら無政府主義者を、暴動や殺人を犯す者という意味の「匪徒」と称したことを指摘している (山崎國紀 『評伝森鷗外』前掲、453頁)。
- 58) 尾形仂 『森鷗外の歴史小説—史料と方法—』前掲、169頁。
- 59) 中村文雄 (1992) 『森鷗外と明治国家』三一書房、186頁。関係者の証言によると、平出は法律的には犯人に弁護の余地はなく、思想論で弁護するしかないと思い、社会主義を学ぶため一週間も毎晩、鷗外宅に足を運んだとのことである (塩田庄兵衛・渡辺順三編 (1959) 『秘録大逆事件』(上) 春秋社、70頁)。ただし鷗外は、被告たちに同情していた訳ではない。山崎國紀が述べるように、「この励む平出の熱心さに共感」(山崎國紀 『評伝森鷗外』前掲、449頁) したためとするのが適切であろう。

なお、本文中の記述・引用は、一部の固有名詞を除き、現代仮名遣い・新字体に統一した。

The High Treason Incident and the Yangmingism of Mori Ogai as Compared with that of Inoue Tetsujiro

YAMAMURA Shou

Department of Japanese Studies,
School of Cultural and Social Studies,
SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies)

Summary

The aim of this paper is to show how Mori Ogai thought about the relation between Yangmingism and the 1910 High Treason Incident through a comparison of his thought with that of Inoue Tetsujiro's. Whereas Inoue stated that the Incident, a socialist-anarchist plot to assassinate the Emperor, was related to Yangmingism, Mori wrote no texts that dealt specifically with the treason incident. However, his novel *Oshio Heihachiro*, a key Japanese Yangmingist, includes certain allusions to socialism, and through reference to this novel, Mori's thought on Yangmingism and socialism will be examined.

Before the High Treason Incident, Inoue believed that Oshio's Yangmingism was the cause of the socialist rebellion that he led. For Inoue, Yangmingism could be connected with socialism. Mori also adopted a critical view of Oshio, but did not straightforwardly link Oshio's rebellious acts with his Yangmingism. According to Mori's interpretation, Oshio's Yangmingism and the violence of the rebellion should be separated. Mori termed Oshio's brand of socialism "still unawakened" and criticized its violence. On this point, his ideas about Yangmingism, socialism and Oshio differ from Inoue's, which connected them all. How the High Treason Incident then influenced Mori's literary production is a subject for subsequent research.

Key words: Mori Ogai, Oshio Heihachiro, High Treason Incident, Yangmingism, Inoue Tetsujiro, socialism